

# グリフィスが歩いた越前

2018.2

## 1 その年の光景

「今日は休日。内戦で死んだ兵士のためのマツリがあった。8時から福井の連隊が行進し、山の墓地で一斉に礼砲を放った。」1870年、禁門の変（幕末の京都が戦場となった内戦）と戊辰戦争の戦没者12名を祀るため、足羽山の上に「招魂所」、現在の招魂社が設けられました。ウィリアム・エリオット・グリフィスが福井に滞在したのは翌1871年。その約一年間、彼は毎日日記をつけていました。先の一文は、秋も深まる11月1日の記述です。

彼は5月にも兵士の行進を見ていて、その様子を姉への手紙に書いています。行進の仕方も服装もだいたい洋式でありながら「時々、頭はちょんまげ」だったり「ほとんどアメリカ人と同じ格好なのに、足元だけ下駄」だったりするのをおかしがっています。この年は福井藩がなくなる年、日本はまさに急激な社会の転換期にありました。その姿を彼は西洋人の眼差しで熱心に観察し、書き残しています。その好奇心の足跡は、彼が暮らした福井城下にとどまらず、越前各地に残されています。今回の企画では、当時の日本の美しい自然と人々の素朴なやさしさに孤独を癒されていたグリフィスが、休暇を利用して触れ合った19世紀の越前をご紹介します。

## 2 海と山の風景

「ここの海岸は雄大な眺めが美しい。柱状の玄武岩の巨大な断崖。」5月17日付の姉への手紙には、週末の休みを利用して三国で観光を楽しんだ経験が述べられています。彼が東尋坊の光景と共に強い印象を受けたのは、「人魚のように泳ぎ、一時間以上潜っている」海女たちでした。「彼女たちは一種のギルドを作っていて、二人か四人一組で潜る。男は決して一緒に潜らない。腰巻以外何も身に着けず、陸地から何百ヤードも離れた所で潜っている。」一番たくさん貝を採った女性は70歳だったそうです。

日本海が気に入ったグリフィスは8月に三国を再訪しますが、この旅の往路では川を下る船からの光景を楽しみました。「女たちが洗濯し、水を汲み、子供たちが遊び、水浴びをしている。たくさんの鶴、時に体長5フィートの堂々たるコウノトリが二羽三羽、鷹、鶇・・・」。けれども夜通し降り続いた雨による濁

流で、翌朝の海は「沖まで何マイルも赤みを帯びた黄色」になっていました。堆積した土砂で港湾機能が危機にさらされていた町は五年後、ひとりの外国人技師を迎えることとなります。ジョージ・アーノルド・エッセル。グリフィスと同年に生まれたオランダ人で、彼の調査・計画を基に三国港は改修されました。現在町の象徴となっている「みくに龍翔館」の外観は、エッセルが三国に滞在した三年後の1879年に竣工した龍翔小学校校舎を復元したものです。

「火のような赤と焦げ茶色に染まる雲海へ沈みゆく太陽、それは恐るべき最後の審判の始まりを思わせた。」三国から帰った一週間後の晩夏、グリフィスは白山を登頂しました。福井に赴任した春以来、「遠くにかすむ、残雪の王冠を被った」その山に登る事は彼の念願でした。頂から臨んだ日没の神々しい光景を「決して忘れる事はない。旅と登山の苦労、疲労と悲嘆は十分に報いられた」と手紙に書いたグリフィスをもうひとつ旅で感動させたのは、彼の食事からマッサージまで主人を支えた使用人、佐平の甲斐甲斐しさでした。また山頂でお湯を沸騰させた温度から標高を計測しているのが、いかにも理化学教師らしいところです。勝山での休息、大野藩士との交流を経て福井に帰った二日後、東京で廃藩置県が発令されました。

山の巡礼宿では蚤に苦しめられたグリフィスですが、彼の旅宿は常に恵まれたものでした。大野で泊まったのは「宿屋ではなく、藩が用意した町一番の金持ちの豪邸」、5月の三国では富裕な油商人の別荘に泊まり、「毎年50000ポンドの茶を横浜に出荷する」商人からも歓待されています。大野藩による「大野屋」経営と全国展開、福井藩士三岡八郎（由利公正）の輸出振興政策で知られる幕末期の越前ですが、グリフィスがこの州の貿易港として最も将来性を感じていたのは、福井赴任の道中で見た敦賀でした。敦賀は「西海岸」すなわち日本海側で最も大きな港町になるだろうと、彼は五年後に出版した著作 *The Mikado's Empire* の中で書いています。

### 3 近代産業社会のはじまり

白山に登る旅で、グリフィスは最初の宿を勝山の寺院に求めました。「唐人」の姿を一目見ようとする人たちで「町はごった返した。実際、道中の町はどれも大変な興奮だった」と彼が書いている手紙にはまた、この旅で「大量の生糸、たばこ、綿、藍を見た」ともあります。勝山藩の林毛川、大野藩の内山良休といった幕末の辣腕政治家の名と共に伝わる諸藩の殖産興業策によって、地域経

済の基盤となる産業が育成されている様子がうかがえます。廃藩後加速する身分制の解体と国際化に伴って近代社会がつくられる過渡期の越前を、彼は旅していました。

国際社会における日本の名誉ある地位を築こうと、海を渡り命を賭して理化学を学んだ福井藩士日下部太郎。彼の最期を知り、福井藩の志を知って、その藩校で理化学を講ずるために来日した米国人。福井に赴任したその月から、授業が午前中で終わる土曜日を中心に郊外へ産業視察に赴く、馬上のグリフィスの姿が見られました。18日、火薬工場。22日、ライフル工場。翌月8日、炭鉱。15日、銅山……。しかし彼が故郷に書き送った手紙で最も詳細に描写しているのは、3月25日に実見した伝統的製紙工程でした。「水に浸け、また洗った樹皮を女性が平な石の上で叩く」。このパルプを米の麩質と水と混ぜて攪拌した材料を、「細い竹組みの四角いふるいで掬い上げ、水を捨てる。」できた紙一枚一枚を広い板で天日干しにする。「一人の女性が一日に700枚作れる。以前和紙の店で見た紙の品質、種類と数には目をみはった。」6月に粟田部を訪れ紙商人に歓待された旅でも「有名な越前和紙」づくりを見た彼ですが、この旅で更に興味深かったと手紙に書いたのは、蚕の繭から絹が織られるまでの光景でした。

粟田部への旅で泊まった立派な屋敷の印象が、その手紙の中にあります。「高価で丈夫な木材で建てられ、300年を経ている。大きな部屋に仏壇があり、新鮮な花と香が位牌に供えられ、毎日祈りが捧げられる。襖絵、象嵌の箱、刀剣、数百年前の古筆……。池と滝、背景に神々しい山々を配した庭園を眺め、厳かな美しさに打たれながらグリフィスは思います。故国には日本人を「野蛮人」「異教徒」と蔑む者がいるが、この「物静かで、礼儀正しく、教養ある人々」の前では、彼らこそ成り上がりでしかないと。日本人を文明化する使命感をもって教育に尽力しながら、彼は越前で知った古い日本の文明の前に謙虚であり、前近代の風土と人間性の美を愛さずにいられませんでした。ただしそれがやがて失われることも彼は知っていました。帰国後のグリフィスは古い日本を追憶し、その歴史・文化を紹介し続けましたが、あくまで彼は近代化に突進する **New Japan** の西洋における代表的支持者でした。

静けさを愛すると同時に、彼は城下で大きなお祭りがあれば必ず、そのにぎわいを楽しみました。伝統行事にふれる事で彼は日本の古い歴史を思いました。その歴史ある国を守ろうとする志に招かれ、維新の熱を直に伝えられた米国人教師の滞在記 *The Mikado's Empire* には、知られざる1871年の越前が描かれています。そしてこの本の前半は、まさに日本の通史なのです。

## グリフィスが暮らした福井

○足羽山 グリフィスの散歩コース。ふもとは九十九橋につながる街道筋としてにぎわいました。由緒ある寺社や古墳がたくさんあります。

○福井城 当記念館至近の場所に、お城の入口「桜門」があり、片町商店街（片側町の意）の名の由来になった外堀を越えて出入りしていました。廃藩後、建物が解体され、堀と石垣が破却されているとグリフィスは書き留めています。

○グリフィスの家 グリフィスの洋風住居（当館のモデル）があったのは城域内。現在の幸橋に近い足羽川北岸です。彼が暮らす九年前まではこの橋は無く、武士はお城と対岸を「繰り船」で往来していました。

○旧酒井外記邸 外国人教師のための洋風住居が完成するまで、グリフィスが住んだ武家屋敷は現在の北の庄城址公園（柴田勝家の古城の中心）辺りで、旧町名「げきさんちょう」の由来となっています。

○藩校 グリフィスが授業を行ったのは福井城の本丸です。「明道館」開館以来、藩校の場所は転々としましたが、グリフィス在籍当時の「明新館」はお城の中心にありました。後身の福井中学も三の丸にありました。

## ○白山

古くから信仰される霊山。越前出身の泰澄大師の名とともに、8世紀以来の登拝が伝わります。御前峰の標高 2702m。麓の「越前馬場」が勝山市の平泉寺です。

## ○三国港

エッセルの調査・計画にもとづき、同僚のたたき上げの技師 J.de レイケの尽力によって大改修されました。河口の突堤は重要文化財です。

## ○粟田部

今立郡にある、物資の集散地として栄えた町。近郊「五箇」村で生産される越前和紙は、徳川日本における最高のブランドであり、グリフィスはその生産現場の様子を、“A Jaunt in Echizen” という文章でさらに詳細に活写しています。

参考文献 山下英一『グリフィス福井書簡』『グリフィスと福井』